

最後の一個

中学二年 角谷 美玖

私には二歳年上の兄がいます。小学一年生の頃私は、学校に行きたくないと毎日泣いていました。泣いている私を、兄は毎日教室の前まで送ってくれました。集団登校している時、突然の雨で傘を上手くさせずに、まごまごしていると、兄は最後尾から走って来て、そっと私を自分の傘に入れ、私の傘を開いてくれました。私が雨や傘が嫌いじゃないのはそのせいかもしれません。私はそんな兄と、おもちゃや食べ物を取り合いをした記憶がありません。とにかく優しいのです。

我が家の食卓には、食べかけのおかしの袋や箱がよく置いてあります。中身は決まって最後の一個。私は気付いていませんでしたが最近母に、「それはお兄ちゃんの優しさの塊だよ。」と言われました。最後の一個を妹にと残してくれているようなのです。この前は、レアな形をした、いわゆる当たりのなチヨコレートが一粒残っていました。もうこんなことで喜ぶ年ではないんだけどなと思いながら、そのチヨコレートを食べました。気のせいかもしれないけれど、ものすごく甘い味がしました。

最近、私は体調を崩しました。そのせいで、電車を途中下車したこ

とがあります。その時、周りの人はせわしなく行き交い、私の様子に気付いてくれる人はいませんでした。みんな冷たいなと思いました。でも、それと同時に、私が逆の立場なら、声をかける勇気があるのかも思いました。きっと私には、そんな勇気はありません。私も冷たいと思った周りの人と同じだな。そんなことを考えていると、ふとあの最後の一個を思い出しました。兄がいつも残してくれる最後の一個。当たり前前に置いてある最後の一個。私がいつももらっている優しさを、いつか誰かにおすそ分けできるような人になろう。そう考えながら立ち上がった時、少しだけ体が軽くなったような気がしました。そして、早く家に帰ろう。色々な気付きをくれた最後の一個を、今日はいつもとより味わって食べようと思いました。

私は中学に入り、初めて宗教に触れました。阿弥陀様や親鸞聖人の教え、法要でのたくさんの方々のご法話を聞く中で、自分自身を振り返る機会をたくさんいただきました。当たり前前のご縁がないと気付けるようになったのも、宗教を学んだおかげだと思っています。これからも、宗教を通じ、たくさんのご縁を学んでいきたいです。